

## 宮澤賢治と現代美術の可能性

—東日本大震災以後の賢治童話と絵本から今を読み解く—



14AR086 松隈 未夏

## ◆目的地

岩手県，東京都

## ◆研究旅行の目的

近年、宮沢賢治が再注目されている。特に東日本大震災後には、賢治の詩や童話が数多くのイベントや行事、番組等で取り上げられてきた。岩手県出身の賢治は、かつて東北が地震や冷害など数々の災害に苛まれた時代に生き、自然災害について思考した人物でもあり、その思想は作中にも表れている。さらに現代のアーティストも宮沢賢治の童話へ熱い視線を送っている。その一人が清川あさみである。清川は賢治童話 2 作品の絵本を手掛けているが、他の絵本とは異なる独特な手法を使って賢治童話の世界観を表現し、注目を集めた。清川は賢治作品について「ファンタジーだがリアルでもある」と述べ、賢治の世界観を現代で表現する意義を考えて制作したという。賢治童話にあるリアル、そして現代性とは何だろうか。今なぜ宮沢賢治の作品が求められているのだろうか。

そこで、震災以後の宮沢賢治と現代、特に清川あさみによる絵本化に伴う現代美術との関連性を研究するため、岩手と東京で資料調査を行う。具体的には、宮沢賢治記念館等で賢治に関する資料を調査し、情報を収集する。また、岩手県立図書館で震災後の賢治関連の地方新聞や地元の雑誌を調査し、データリストを作成する。東京では国立国会図書館等で岩手県以外の賢治関連のイベントを調査する。また東京では、清川あさみに関連する資料や参考図書、比較対象となる賢治童話の絵本等も閲覧し、多角的に調査と分析を行う。

## ◆期待される効果

宮沢賢治記念館やイーハトーブ館など、岩手には宮沢賢治に関するあらゆる資料が集まっており、できるだけ多くの貴重な資料や情報に目を通すことで、より一層理解を深めることができると考えている。また、東北という地と自然災害が宮沢賢治の作品に及ぼした影響は大きく、東北の土地や賢治が当時使用していた施設を訪れることは、研究対象の立体的な把握につながる。さらに、現地の生の情報を得ることは、研究のためだけでなく、「今」を考えることにおいても意義のあるものになると考える。

詩「雨ニモマケズ」をはじめ、多くの賢治作品は復興へ向かう人々の心の支えとなっている。震災で津波に襲われた三陸鉄道の島越駅には、周りの建物は破壊されたなかで、唯一奇跡的に残った宮沢賢治の詩碑があり、賢治と震災の不思議な繋がりが、何度か新聞でも取り上げられ、人々に様々な思いを抱かせている。このようなことから、実際の場所を訪れることは賢治と地域社会との関わりについて肌で感じるができる貴重な機会であるといえる。

また、国立国会図書館には日本で発行されたほぼ全ての出版物が所蔵されており、宮沢賢治や清川あさみの関連資料を調査するだけでなく、震災以後の賢治のイベントについて「岩手以外の地域」の情報も収集することが可能であり、岩手とその他の地域についての比較研究を行うことが可能となる。卒業論文のテーマとも重なるため、今回の研究旅行で得られる様々な情報や経験を、学生時代最後となる研究に活かしていきたい。



◆日程

	滞在地	行動・調査内容
8月26日	岩手県 花巻市 盛岡市	<ul style="list-style-type: none"> <li>・羅須地人協会</li> <li>・岩手県立図書館で岩手の新聞記事を調査</li> </ul>
8月27日	岩手県 花巻市	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宮沢賢治記念館でボランティアガイドの方にお話を伺う</li> <li>・宮沢賢治イーハトーブ館</li> <li>・宮沢賢治童話村</li> <li>・宮沢賢治詩碑</li> <li>・桜地人館</li> </ul>
8月28日	東京都	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国立国会図書館で震災後の宮沢賢治に関するイベントや清川あさみに関連する資料を調査</li> </ul>
8月29日	東京都	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国立国会図書館で引き続き清川あさみと宮沢賢治に関連する資料の調査</li> </ul>



～花巻～

## ■成果報告

### \*はじめに

宮沢賢治は、岩手県の裕福な家庭に育ち、農林学校での成績も優秀で、上京後再び花巻に戻り、花巻農学校の教諭となる。農業指導にも奔走し、数多くの短歌や詩、童話を残した。賢治の作品は 50 人を超える画家や作家により絵本化がなされ、その数からも、その魅力を推量することができる。なかでも私は清川あさみが手掛けた絵本に魅かれた。彼女が現代で宮沢賢治の童話を絵本化する意義とは何だろうか。



今回の研究旅行は、震災後賢治が再注目されたことを踏まえて、賢治の故郷である花巻を訪れ、文字情報からだけでは知ることのできない「感覚」をつかむ、いわば私の「心象スケッチ」の旅でもある。

## 1、現代での受容

飛行機の窓から見える花巻の地は、見渡す限り田畑と山々が広がり、天候にも恵まれ、豊かな緑と空の青がとても美しかった。

初めに、**羅須地人協会**を訪れた。羅須地人協会は、賢治が農学校退職後、青年や篤農家を集めて稲作法や農業芸術論などを講義するために設立したものである。「賢治先生の家」は、花巻農学校の敷地内にあり(復元)、その日は高校の授業が行われていたのか、チャイムの音が聞こえ、生徒たちの姿も見ることができた。身近に賢治の精神に触れている生徒たちは、少なからず影響を与えられているのではないだろうか。家の玄関口には、来館者の寄せ書きノートのようなものがあり、そこには、遠方から訪れた人の名前や、年齢を問わず多くの来館者の跡があり、賢治に対する感謝の言葉をみても、賢治のすごさや影響力を感じることができる。辺りは静かで、ゆったりとした時間がながれていた。



▲賢治先生の家





岩手県立図書館では、岩手県の地方新聞(岩手日報, 岩手日日, 盛岡タイムス, 河北新報など)の記事やマイクロフィルムを閲覧し、調査を行った。震災後の新聞記事を読むと、宮沢賢治に関するイベントが多数開催されており、特に詩「雨ニモマケズ」が多く取り上げられ、いかに復興へ向かう人々の心の支えとなっているかということを読み取ることができた。東北の人それぞれが、様々な思いを賢治の作品から受け取っているのだろう。

郷土資料コーナーでは、宮沢賢治のコーナーも設けられており、ここでは多くの種類の絵本も閲覧した。日本のものだけでなく、外国語に翻訳された海外の絵本もあった。

### ◎調査した資料(一部)

- ・『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』  
(宮沢賢治学会イーハトーブセンター, 第43号~第46号, 2011年9月~2013年3月)
- ・「世界に広がる「雨ニモマケズ」 盛岡で牛崎さん(賢治記念館副館長)公演 賢治作品の生命観 多くの人から共感」(『岩手日報』2011年6月1日)第16面
- ・「津波にも負けず 賢治歌碑 鳥越駅で唯一残る」(『朝日新聞(岩手版)』2011年4月17日)第23面
- ・「被災者に前向き力」(『岩手日報』2013年1月1日)第2面

## 2、宮沢賢治という人物

宮沢賢治記念館では、賢治に詳しい、花巻観光ボランティアガイド(ガイド歴12年)の方にお話を伺った。主に、震災後宮沢賢治が再注目されているということについて尋ねた。

もともと農民ではなかった賢治は、郷土の改造活動を行う際に、実際に現場に赴き、農民と触れ、対話したという。賢治にとって、農民の心を分かろうとすることが大切だったのである。

賢治は、自分は動かずに、外から入ってくる情報だけで判断するのではなく、その情報のもとになった現象は何なのか、自分の目で確かめる、「心象」=メディカルスケッチを大事にした人物でもあると伺った。詩「雨ニモマケズ」の文中に、「行ッテ」という言葉が(書くつもりだったと推測されるものも含めて)4回も使われているが、実際に「行ッテ」、自分が感じることで相手の心を分かろうとすること、また、農民と触れる中で、責任回避や言い訳などの農民の狡さも知った賢治は、自分の仕事に責任を持つことの大切さも痛感していたということから、このようなことが、宮沢賢治が現代で再評価され、震災後注目されることとなった一つの所以でもあることがわかった。



現代に生きる私たちは、テレビやネットなどから情報を得ることが多いが、テレビ等の情報は、そこに様々な意図があり、多くの人々のフィルターを通して伝わっていくというような話も聞いた。今回の旅行もそうだが、外から得た情報から想像することと、自ら現地に「行ッテ」感じることは同じではないということを改めて実感することができた。

余談として、宮沢賢治の“偶然”についてのお話も聞くことができた。賢治が1896年の明治三陸地震が起きた年に生まれ、1933年の昭和三陸地震が起きた年になくなったこと。震災で津波に襲われた三陸鉄道の島越駅に唯一奇跡的に残ったものが、宮沢賢治の詩碑だったこと。そして、「雨ニモマケズ」が書かれた手帳の日付に「11.3」とあり、逆から読むと「3. 11」になること…。賢治と震災との不思議な繋がりがそこにはあった。  
(私が記念館を訪れた8月27日は偶然にも宮沢賢治の誕生日だった…)



### 3、花巻と“賢治さん”

ボランティアガイドの方をはじめ、私が訪れた施設で働く方、花巻の人たちは、宮沢賢治のことを「賢治さん」あるいは「賢治先生」と呼んでいたことが印象的だった。何十年も前の人なのに、「他人」ではなくまるで、近所の「知り合い」を呼んでいるように聞こえ、それほど賢治がこの地に浸透し、賢治の精神を大事にしている人がたくさんいるということが感じられた。

花巻の街には、いたる所に賢治さんに関わるネーミングの建物や、関連するものがあった。



▲宮沢賢治イーハトーブ館





確かに賢治さんは震災後再注目されたが、それは人為的なものではなく、人々が無意識に思い出し、結果的にそうなったのだというボランティアガイドの方の話をふと思い出した。



▲林風舎

宮沢賢治の弟、清六氏のご子息である宮沢和樹さんが経営するお店



▲桜地人館



←未来都市銀河鉄道

日が沈み、暗くなると壁に画が浮かび上がる



▲この道の先に、「雨ニモマケズ」詩碑(右写真)があった。詩「雨ニモマケズ」は賢治が亡くなる 2 年前に手帳に書き留められたもの。

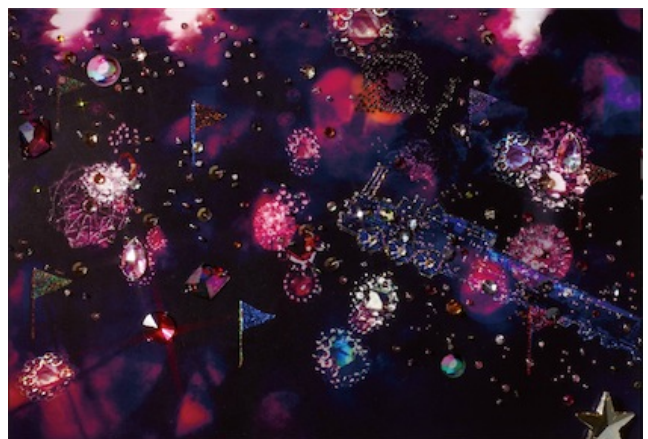


## 4、清川あさみによる絵本

2日目には、宮沢賢治童話村を訪れた。



施設内の「賢治の学校」の中の巨大万華鏡でできた「宇宙の部屋」では、天井に天の川や星座が表現されており、清川あさみの絵本を連想できると思った。清川あさみは、宮沢賢治の作品『銀河鉄道の夜』(2009年, リトルモア)と『グスコーブドリの伝記』(2012年, リトルモア)の絵本化を手掛けている。



▲『銀河鉄道の夜』表紙(左図)、64頁(右図)



東京では、**国立国会図書館**で、宮沢賢治と清川あさみに関する文献・資料を集めた。

国会図書館では、あらゆる種類の資料や出版物の閲覧が可能で、研究や調査のために訪れる学生や、一般の社会人の方など、幅広い年齢層の人が利用していた。他の図書館にはない、厳重なセキュリティ体制には少し驚いたが、調査予定の資料はほぼ閲覧することができた。調査により、2011年3月～2013年3月の期間だけ

でも、宮沢賢治に関するイベントは全国で60以上行われ、取り上げられた新聞記事に関しては、240以上の記事があることを確認することができた。



### ◎調査した資料(一部)

- ・『宮沢賢治研究 annual』(宮沢賢治学会イーハトーブセンター, 第22号, 2012年3月)
- ・東京都庭園美術館編『Stitch by stitch : ステッチ・バイ・ステッチ針と糸で描くわたし』(求龍堂, 2009年)
- ・今泉忠明「自然遺産に生きる稀少動物--最後に残された野生動物の繁栄の地」(平凡社『UNESCO世界遺産年報』第5号, 2000年)
- ・『宮沢賢治・詩と絵の宇宙 : 雨ニモマケズの心』(アート・ベンチャー・オフィス ショウ編集・制作, 2012年)

震災後の宮沢賢治と清川あさみをつなぐ手がかりとして、2011年に清川あさみが出版した絵本『もうひとつの場所』(リトルモア)がある。この本はこの本は絶滅種を題材にしており、『銀河鉄道の夜』(2009年)と『グスコーブドリの伝記』(2012年)が出版される間の時期に出版された。清川には、「失われた命」に対して、心に感じるものがあったと思われる。そして、この時期に何らかの意味をもって制作したに違いない。最後の2ページ(下図)は、震災後に清川が新たに付け加えた画である。

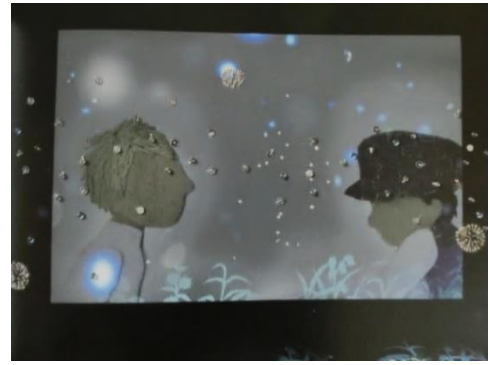


▲67頁「火の鳥の夢」



▲69頁「希望の樹」

清川の絵本の画の特徴として、登場人物の感情を表現するのに重要な顔のパーツである「目」はなく、「口」が書かれた顔も少ないということが挙げられる。これは、読者自身が登場人物の感情を読み取るということが可能にしているといえる。読者は、ただ物語を「受け取る」のではなく、自分自身で「解釈する」のだ。ここに、宮沢賢治との関連性があるのではないだろうか。曖昧で、これだというはっきりとした答えは存在しない。だからこそ、自分で「考える」ことができる。今まで正しいと誰もが考えていた常識が崩れ、情報は氾濫し、何が正しいのかわからない、そんな時代(=現代)で生きるわたしたちにとって最も重要なことは、情報を単に受け取るだけでなく、「自分」で「考える」ということなのかもしれない。宮沢賢治の文とあいまって、清川の画にある素材の温度感や光、色の美しさに心が触れることで、自分自身の中にしかない感情や思いを引き出してくれる、そんな「可能性」を絵本は含んでいるのではないだろうか。その感情は、まぎれもなく「今」このときの自分の「答え」であり、それは絵本にある「リアリティ」の一つなのかもしれない。



▲清川あさみ『銀河鉄道の夜』96頁  
ジョバンニとカムパネルラ

## \*おわりに

今回の研究旅行の収穫は、卒業論文執筆のための資料収集はもちろん、実際に宮沢賢治の故郷花巻を訪れ、調査を行ったことで、私の宮沢賢治に対する姿勢やイメージがずいぶん変わったことである。当初は(勉強不足であったこともあるが)論文等を読んでもなかなかその魅力を自分自身で体現することができず、正直賢治童話に対して「よくわからない」という印象を持っていた(これは研究テーマに選んだ理由の1つでもある)。しかし、賢治の精神や生き方、農民・故郷に対する姿勢を花巻の地で学び、地域に浸透している実態を知ること、以前よりも彼の人物像をつかめたような気がする。また、震災後、いかに賢治が人々の心の支えとなったか、その理由のようなものも感じとることができ、宮沢賢治を単なる「研究の対象」ではなく、過去に同じ土地を生きた「ひとりの人物」として捉えられるようになった。この旅行で得た「感覚」、そして新たに浮かんだ「疑問」や「考え」を、卒業論文に活かし、自分なりの「答え」を出したいと思う。

最後に、今回の研究旅行に際してお世話になった国際文化学部の先生方、教育・研究推進部の職員の皆さん、計画時に様々なアドバイス等をして下さったゼミ担当の西村先生、現地でお世話になった方々、そして「賢治さん」に、このような貴重な経験をさせていただいたことを感謝いたします。ありがとうございました。

## ◎参考文献

- ・宮澤和樹『宮澤賢治 魂の言葉』(2011年, KKロングセラーズ)
- ・宮沢賢治記念館『宮澤賢治』(2009年, 宮沢賢治記念会)